

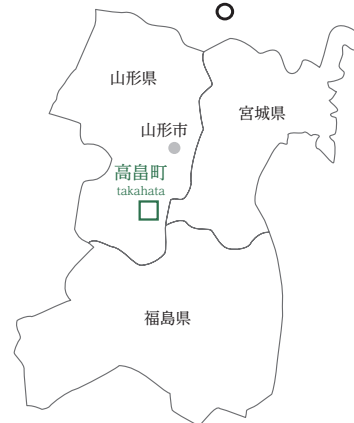
「産直」は一日にしてならず

## 「農業はひとりでする もんじゃない」という支え。

米沢郷牧場（山形県高畠町）

山形県高畠町を拠点とする米沢郷牧場は、鶏肉をはじめ、りんご、さくらんぼなどの果実の産地。

約30年前、パルシステムとともに抗生物質をエサに加えない養鶏に挑み、リーダー的存在として他の産地をけん引してきた。パルシステムの産直で、もっとも古くから取引のある産地のひとつ。そんな米沢郷牧場の歩みをたどる。



伊藤幸蔵さん

父・幸吉さんの跡を継ぎ、2008年から米沢郷牧場の代表を務める。有機米や果実、野菜などの農家が参加する「(有)ファーマーズクラブ赤とんぼ」を自ら設立。「有畜複合型」の農業を進めている。

### 6万羽の養鶏場の正面にできた「道の駅」。

鶏はエサの消化能力が低いため、どうしてもおいがきついいわれる。ところが、「米沢郷牧場」の養鶏場は、ほとんどにおいが気にならない。その証拠に、米沢郷牧場のなかでも最大規模、約6万羽を飼育する養鶏場の向かいに「道の駅」があるくらいだ。

「普通、養鶏場の前に道の駅は作らないですよ。それが、道の駅のほうがあとからやってきて、俺たちの真正面に店を出した」。そう言って笑うのは、代表の伊藤幸蔵さんだ。

高度成長期を過ぎ、激しい価格競争のなかで日本の畜産は、高効率化、大規模化の方向に急速に進んだ。かつて農村では、それぞれの農家が稲作や野菜づくりの傍ら家畜を飼い、残り野菜やくず米を与え、その排泄物を堆肥にして田畑にまくというスタイルが一般的だったが、そうした「有畜複合型」の農業は今ではほとんど見られない。堆肥にリサイクルされていたふん尿は田畑がなければ廃棄物でしかなく、おいの問題もあって、飼育の現場はどんどん地域から遠ざけられてきたのが現実だ。



■山形県置賜地域にある高畠町は宮城、福島両県に隣接する有機農業の先進地。「まほろばの里」と呼ばれる歴史ある地域。

■1978年、伊藤幸蔵さんの父・幸吉さんが中心となって米沢郷牧場を設立。現在は置賜地域の約200戸の農家が参加し、宮城県内にも鶏舎がある。

■全国に先駆けて2006年に飼料米の栽培を始め、昨年から『日本のこめ鶏』を本格生産。養鶏飼料の自給化に力を入れている。

1985



タマ生協まつりのステージで話をする伊藤幸吉さん。タマ消費生協（現・パルシステム東京）に売れ残ったぶどうを持ち込んだのが、パルシステムとの産直のきっかけとなった。



1978

農事組合法人「米沢郷牧場」を設立したころのメンバー。伊藤幸吉さん（前列の右から2人目）を中心に、肉牛や果実の産直を始めた。

こうしたなか、米沢郷牧場は一貫して地域と共生する畜産を模索し、実現してきた。  
「田畑も畜産もあって、初めて地域内での資源が循環する。だからうちは、地域から畜産を切り離さない。あくまでも、地域の中で生きていく道を選んできたんです」（伊藤さん）

### 都市生活者とのつながりに見出した希望。

ここで、米沢郷牧場の歴史を振り返ってみよう。鶏肉の産直産地としてなじみが深いのが、その名に「牧場」とあるように、米沢郷牧場は、もともと伊藤さんの父・幸吉さんが肉牛の生産者仲間と作った組織だ。

60〜70年代、幸吉さんたち畜産農家は、子牛とエサを農協から借りて牛を育て、大きくなった牛を農協に出荷していた。ところが、73年の石油ショックで牛肉価格が大暴落し、多くの農家が借金を抱えて離農を余儀なくされた。

幸吉さんたちは、「田畑を売って借金を返せ」と迫った農協と、農家の手取り価格だけが下がるような流通のしくみに猛反発し、「自分たちの作ったものは自分たちで価格を決めて、自分たちで売る」と決意。市役所や労働組合、学校の教員などへの直接販売を始めた。

パルシステムの前身生協との出会いもそのころにさかのぼる。地元での販路開拓に限界を感じた幸吉さん。知り合いの土工に借りたトラックにぶどうを山積みし、当時開発されたばかりの「多摩ニュータウン」に繰り出したものの、なかなか売れない。ところが、偶然飛び込んだタマ消費生協（現・パルシステム東京）に残りのぶどうを置いて帰郷したところ、後日、「全部売れました」との電話が入ったのだ。

「この時初めて親父は、生協を意識した。都市部の市民が生協を作って、産地を理解しようとしてくれてい

ることがうれしかったようです。一方で、自分たちだけで販売や配送をするむずかしさも実感していたから、都市の市民とつながっていくことに農家の自立への希望を見出したのでしょうね」（伊藤さん）

そして、都市の生協に対応する形で1978年、農事組合法人・米沢郷牧場は設立された。

### 抗生物質を飼料に使わない養鶏に挑戦。

肉牛やぶどうなどを生産していた同牧場に、鶏の飼育、それも、病気を予防する抗生物質や合成抗菌剤をエサに使わない「無薬飼料飼育」の話を持ち掛けたのはパルシステムだった。

「当時の常識から言うと、鶏のエサに抗生物質を入れないなんてありえないこと。他の鶏肉産地にも声をかけたようだけど、『全滅させる気か』と断われたらしく、同じ畜産だし、伊藤幸吉ならやると言うんじゃないか、と話が回ってきたようですね」と伊藤さんは苦笑する。

養鶏に関してはまったくのシロウトだったが、「エサ代とヒナ代はパルシステムが負担する」という条件で実験生産を8年にスタート。もちろん、最初は全滅覚悟だった……。

「それが、はじめからうまくいったんですよ」と伊藤さん。

「鶏の身体がなかなか大きくなって経済的には大変だったようですが、鶏を『死なせない』という意味では成功だった」

なぜ、ほかの養鶏場で「非常識」と言われることが、米沢郷牧場では成功したのか。それについて伊藤さんは、「答えはシンプル。生かすことを優先させたから」と分析する。

経済面から考えれば、同じ面積でいかにたくさん



昨年開かれた公開確認会で、米沢郷牧場のBMWプラントを視察する参加者。

米沢郷牧場では鶏のエサの一部で「99%自給」を実現させている。



飼料米をエサに利用する「こめ鶏」と伊藤幸蔵さん。



子どもや孫も入って撮影された伊藤幸吉さん(右端)の一家。今では、長男の幸蔵さん(後列中央)と次男の充孝さん(後列左端)があとを継いで、米沢郷牧場を引っ張る。

鶏を、いかに短期間で出荷するかが命題になる。鶏を密集させて飼育すれば病気も広がりやすくなるから、抗生物質は欠かせない。けれど、最初から抗生物質などを使わない「無薬」が前提だった米沢郷牧場では、とにかく「鶏を生かすこと」「鶏を健康に育てること」に心血を注いだ。坪あたりの羽数を抑えて鶏が運動できるスペースを確保。高カロリーのエサで成長を急ぐのではなく、自前の発酵飼料を与えて腸内環境を整え、時間をかけて育てた。つまり、成功のカギは、一般の養鶏場とは真逆の発想にあったのだ。

「生きものは生きものらしく」——今も米沢郷牧場を貫く基本姿勢は、このときに培われたもの。

「においが少ないのも、鶏が健康に育っているからでしょう。でも、これもパルスシステムの支援があったからこそできたことです。どんなにまともなものを作ろうと思っても、評価してくれる人がいないと作ることができない。その点、うちは恵まれていたと思いますね」(伊藤さん)

### 『こめ鶏』につながった資源循環型の農業。

地域の中で、米や青果の生産者との連携を常に追求してきた米沢郷牧場は、もみ殻、米ぬか、大豆かすなど未利用資源のリサイクルに力を入れ、「できるだけ廃棄物を出さない」食生産を実践してきた。

資源循環のために欠かせない施設が、自社内の堆肥センターと飼料工場、そして家畜のふん尿と岩石から「生物活性水」を作るBMWプラントだ(※)。堆肥センターでは、鶏をより自然でストレスなく育



実りの時期を迎えた飼料米

てるため鶏舎に敷いていたもみ殻に生物活性水をかけて、約半年間熟成。稲作用、野菜用など用途別に成分を調整して4種類もの堆肥を製造する。ここまで堆肥を作り分ける産地はまれだ。

飼料工場でも独自の取り組みを進めている。製造しているのは、米ぬか、自家培養の植物性乳酸菌などで作った「基礎菌体」を添加したオリジナル飼料。さらに、全国に先駆けて2006年から飼料米の導入実験をスタートさせ、パルスシステムで『こめ鶏』を供給している。

「日本の飼料自給率は25%程度しかなく、エサは輸入するのが当たり前になっていますが、うちのやり方なら地域内で畜産が成り立つ。肥料だって同じ。エサも肥料も、もともとは地域の資源でまかなわれてきたもの。昔ながらの資源循環型農業こそが、これからの日本農業の切り札のひとつになると思います」

### 農業から若者や高齢者や女性を切り離さない仕組み。

資源循環のほかに、もうひとつ、米沢郷牧場がこだわってきたのは、地域の若者や高齢者や女性も農業から切り離されないような組織づくりをすること。

グループのひとつ、「(有)ファーマーズクラブ赤とんぼ」(以下、「赤とんぼ」)は、大学を卒業し山形に戻った幸蔵さんが、有機栽培の米作りをするために95年に設立した生産者組織だが、その背景にはこんな思いがあった。

「地元に戻ってみたら、若者が出る幕がない。発言の場もない。そこで、若手が主体的に活動できる場をつ

※BMWとは、土の中のバクテリア(B)、石のミネラル(M)、水(W=ウォーター)を使って、家畜のふん尿などの汚水を浄化する技術。生物活性水とは、BMWで得られるミネラル豊富な水で、家畜の抑え、健康を促進するなどの動きがある。



パルシステム埼玉の組合員と家族が昨年9月、産地交流会で米沢郷牧場を訪問した。収穫体験では、大きな西洋なしを見て、子どもたちから「ワァッ」という歓声があがった。



米沢郷牧場はさくらんぼ(写真上)やりんごの産地としてもおなじみ。



自宅の田んぼ前に立つ、在りし日の伊藤幸吉さん(左)と幸蔵さん父子。

くろうといろいろ考えた。結果的には、若者だけじゃなく、じいちゃんたちの力に支えられているんですけどね」

赤とんぼには、稲作を中心に、果物、野菜、畜産など複合農業を営む生産者が所属している。機械作業や重労働は若手が受け持ち、軽作業は女性や高齢者が行なう分担の仕組みもある。農産加工品作りの主役は女性部のメンバーだ。

2000年、赤とんぼは、環境保全の国際標準規格である「ISO14001」認証を取得。これは、農業生産の法人として日本で初めての快挙だ。

「天候など不確定要素が多いため環境目標を決める段階から一筋縄ではいかない作業だけど、若手が率先して取り組んでくれた。この経験を経て、内部での若手への信頼がぐんと高まりましたね」

「農業を嫌だと思ったことは一度もない」

米沢郷牧場の創設者・幸吉さんは、パルシステムの産直のけん引車となり、日本の環境保全型農業の先駆者として強烈な存在感を放っていたが、2008年に帰らぬ人となった。後継者となった幸蔵さんの胸に去来するのは、どのような思いなのだろう。

「親父が元気なときには遠慮や気恥ずかしさもあって、膝を詰めて話をしたことなんてなかった。でも、今になっていろいろわかってくると、親父のやってきたことは、成功も失敗も含めて俺でもこの道を選ぶだろうということが多い」

農業の道に迷わず進むことができたのも、子どものころから生協の交流会



などに連れていかれ、「農業はひとりでするものじゃない」「仲間や認めてくれる人がいる」という感覚が自然に身につけていたから。自分の作ったものを「食べたい」と言ってくれる人の顔を、すぐに思い浮かべることができたからだという。ほかの産地の大先輩たちとも子どものころから顔なじみの関係となった。

「農業を嫌だと思ったことは一度もない。米沢郷って楽しい、つまり、農業って楽しい、というイメージしかなかった。その点でも親父には感謝しています」

ただ、伊藤さんは20歳ぐらゐのときに一度、家を出る決意をしたことがあるという。

「親父と比べられたくない、自信がないから戻らないうって言ったんですよ。そのときに親父は、『今のお前と俺が同じだったら、俺の24年間はもうなるんだ。今のお前と俺じゃなく、24年後のお前と俺で考えてみる』って言っていた。俺、今、うっかりそのときの親父の年になっちゃいましたよ。伊藤さんは笑いながら、感慨深げに振り返る。

TPPをめぐる情勢も不透明な今、日本の農業を取り巻く環境がどのように変化していくか、不安を抱えている生産者は多い。けれど、どんな状況においても、地域とともに生き、常に「ここにしかできない」農業を追求する米沢郷牧場の姿勢は変わらないだろう。

「これからも食べる人との顔の見える関係を大事にしていきたいと思っています。だって、『生きものの観察』なんかで子どもたちが田んぼに入ると、じいちゃんたちのモチベーションが上がるんですよ!」

米沢郷って楽しいという思いは、そんな光景からも広がっていく。